

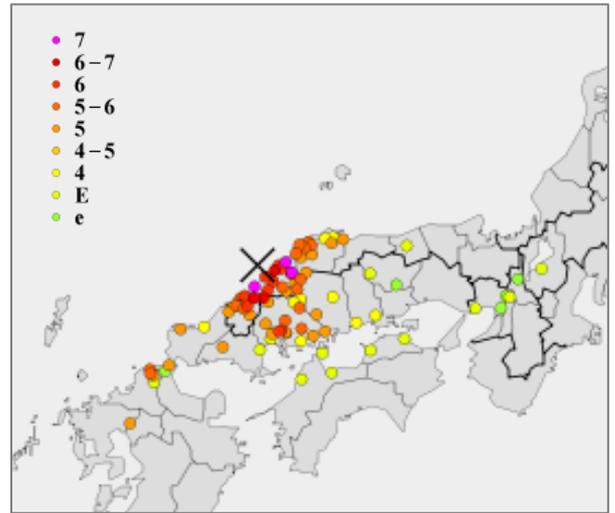
浜田地震

【明治5(1872)年3月14日】

■地震の概要

3月14日午後4時40分頃、島根県浜田市沖を震源とする地震が発生しました。地震の規模を表すマグニチュードは7.0~7.2、最大震度は後の被害状況の研究から浜田、江津、大田などの一部で7と推定されています。地震のタイプとしては、陸域または沿岸域の浅い場所で発生したものです。この付近では顕著な活断層は確認されていません。

本震の約1週間前から石見東部や出雲西部では鳴動、当日午前中には微震、1時間前にはかなり大きな前震があったとされています。浜田では本震の数十分前から潮が引き、約300m沖合の鶴島まで歩いて渡れ、アワビを採って来ることができたと言います。



浜田地震の推定震度分布

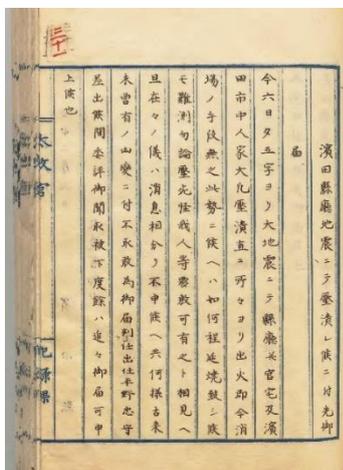
【出典資料：宇佐美龍夫「最新版 日本被害地震総覧」】

■被害の状況

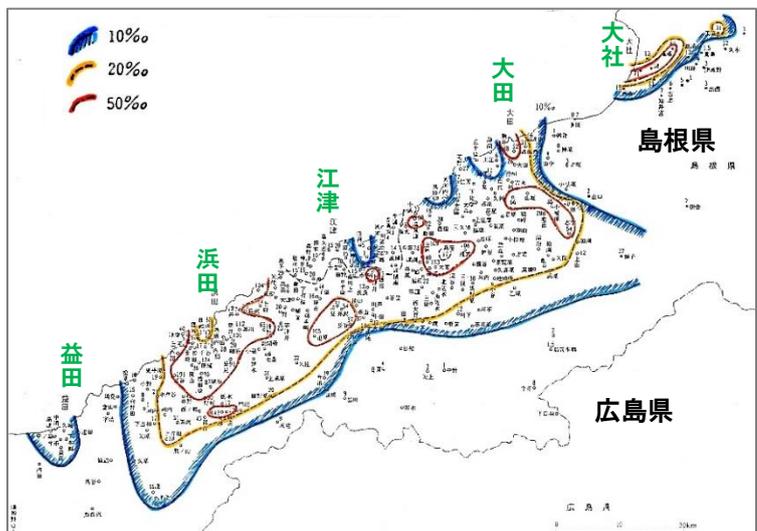
この地震による被害は、当時の浜田県（石見地方）を中心に、島根県全体では死者551人、負傷者581人、家屋全壊約4,250棟、焼失230棟などとなっています。被害地域は、震源に近い浜田付近から東側により広く伸びています。出雲地方でも大社地域を中心に被害が出ており、これは震動が地中を伝わって軟弱な出雲平野西部に達し揺れを大きくしたためと考えられます。広島県内でも家屋の倒壊があり、山口県萩市沖の見島では海面が約1.2m上昇したと言いますが、中国地方の他の県では大きな被害には至っていません。

地震のあと、当時の浜田町内では至るところで火災が発生し、実数は把握されていませんが、火災によって多くの人命が奪われました。また、中山間地域を中心に山崩れも多発し、大江高山山麓の邇摩郡大家村（現、大田市大代町）では、地滑りや山崩れによって20人が死亡しています。このほか、至る所で土地の隆起・陥没、土砂・泥水の噴出などが起きたことが記録されています。

東京の新聞は、およそ二十数日遅れの4月8日付け紙面に「浜田県内はかつてない大地震で浜田町の家屋のほとんどが大破・焼失」と第一報を伝えています。当時は、明治維新政府の体制も十分確立したとは言えない時代でしたが、浜田県から大蔵省への被害届に対し、「窮民一時救助規則」に基づき政府から直接救助金が支払われ、被災者の「極難ノ者」へ15日間の食糧焚出しなどが行われました。



浜田県庁から大蔵省への震災届出文書
【国立公文書館蔵】



浜田地震による島根県の家屋被害率(%)

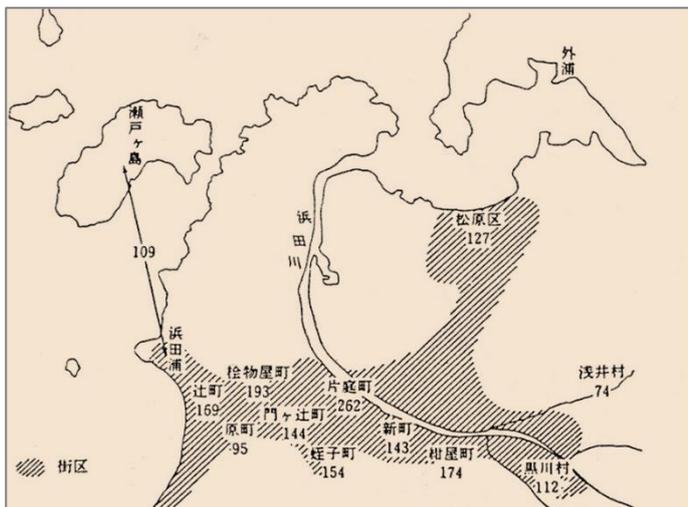
【全壊+(半壊)/2/人口の千分率で表したもの【出典：松江地方気象台「島根の気象百年」】

■浜田地震による被害

区分	単位	石見(浜田県)						出雲	計
		那賀郡	うち浜田町	邑智郡	邇摩郡	安濃郡	美濃郡		
死者	人	288	97	80	137	32	0	14	551
負傷者	人	378	201	75	101	18	2	7	581
焼失家屋	軒	188	92	20	19	-	-	-	230
潰家屋	軒	2,303	543	485	742	440	79	-	4,256
半潰家屋	軒	2,396	210	868	1,294	671	200	-	7,907
大損家屋	軒	2,391	168	-	2,317	2,026	-	-	-
山崩れ	箇所	2,522	-	1,927	1,487	124	507	-	-

※計の数値は不明部分があるため、表の横欄合計と必ずしも一致しない

(出典：松江地方気象台「島根の気象百年」)



浜田地震による浜田町の家屋被害率(%)

[全壊+(半壊)/2]/人口の千分率で表したもの【出典：松江地方気象台「島根の気象百年」】



浜田市の畳ヶ浦

浜田地震で隆起し現在の景観になったとされるが、隆起量については0.3~1.2mなどの諸説がある。

災害の記憶を伝える



震災記念之碑は、浜田地震から25年後の明治29年に建立され、大正14年に浜田川のほとりに移設されました。昭和18年の水害で流されましたが、引き上げられ再建されています。碑文の大意は下記のとおりです。



震災記念之碑
(島根県浜田市牛市町)

天変地異はいつの時か起こる。蓋し平生の備えが必要であろう。明治五年二月六日、浜田の街に大地震が起こり、家は裂け倒壊し、四方で火災が起き、人や家畜が死傷し、繁華な町は一日で廃墟となった。我が牛市は被害が最も激甚で、戸数八十有るうち、あるものは倒れ、あるものは焼失し、残ったのは僅か三戸であった。死別した者も多く、親を亡くした者、子を亡くした者もあり、一家が絶滅した家門もあった。住む場所も家も無く、多くの生命と財産が失われた。

先人曰く、浜田は昔から地震が多く、近くは安政元年十一月五日と安政六年九月九日に地震があり、家が傾き庇は落ち、人々は野外に避難した。しかるに、明治五年の災害は最大の惨劇で、その日は曇りで無風、午後に微震があった。日暮れに至って突然大地震が発生し、大きな上下動によつてたちまち家屋は倒れた。その後も微震は数か月、止まなかった。前年の冬には井戸の水が涸れ、大雪が降り、東北の海上が赤く染まった。

今や家は立ち並び、民は安堵している。既に惨劇の跡は無く、復旧の効果はあったといえる。平生の忙しい中でも、この災害のことを忘れないよう心掛けなければならない。

明治二十九年二月

※碑の写真をクリックすると位置が表示されます